北宋全盛期の歴史

吉田清治著

昭和十六年十月三十日　弘文堂發行
A5判二二一頁　定價參圓貳拾錢

たしか大學二回生の初め頃だつたと思ふ。その頃、讀み漁つた宋代に關する諸種の論文のうちで、未だに印象の消えないものの一つとして吉田清治氏の「北宋に於ける黨爭の主因について」（歴史と地理三二ノ四）がある。それは北宋時代の黨爭を儒學閥の對立と、政治家の出身地の關係より觀んとしたもので、よく纏つた論文であり、私はこれから色々な意味で少なからず示唆をうけたことを記憶してゐる。

爾來、氏としてはその他に餘り研究を發表されたのを見なかつたところ、最近に至つて非常な勞作を一つの纏つた單行本として世に問はれた。それが今茲に紹介せんとする「北宋全盛期の歴史」である。同氏の年來の研究が實を結んだのであらう。その苦心もさることながら、一人の著者の手になる宋代通史の出現が待望されてゐた折柄、この書はたとへそれが宋代前半だけの歴史とは言へ、學界へ寄與するところ少しとしない。

さて本書は著者が政治史方面を得意とされる關係上、本書を一貫して流れてゐる一つの特色は、社會史的よりもむしろ政治史的な角度に、經濟史的な立場よりもむしろ儒教的な立場に立脚しつゝ被治者の社會よりもより多く治者の世界を、數多の庶民の社會よりも少數政治家の世界を描出するに重點が置かれてゐる。即ち本書はどちらかと言へば北宋政治史とでも言ふべき概説書であり、その意味に於ける「北宋全盛期の歴史」がえがいれてゐる。從つて社會・經濟・財政の立場を強く重んずる人達には或は多少の物足らなさを感ぜしめるかも知れない。從來、

宋代研究者にはどちらかと言へば野心的に社會・經濟の諸問題を好んでとり上げ、地味な政治思想や文化方面の探究は妙に之を敬遠する傾向があつた。けれども宋代史の課題がたゞさういふ分野にのみ限られてゐるといふわけでない。その意味から本書の如き通史も大いに歡迎されるべきである。學士の參考文獻は卷末にも附記されてゐる樣に、十五六を數へるが、北宋時代の速記錄とも言ふべき續資治通鑑長編を着實に通讀して、これを骨子とされたものの如く、他の豐富な宋の資料は必要にして且つ充分なる程度に參考しつゝ、愼重に史論をすゝめられてゐるのが好感を與へる。

以上は本書の第一印象であるが、實は私が本書を手にしたとき、著者が何れの時期をもつて「北宋の全盛期」とされたのかに大なる興味を覺えた。結局著者は、仁宗・神宗の時代卽ち范仲淹・王安石の二政治家の出る時代を「全盛期」とされる、これは岡崎博士の卷頭「導言」にも明言されてゐるが、更にもう一歩進んで言ふと、神宗時代よりも范仲淹を中心とする慶曆時代の方に「全盛期」を置かうとされてゐる樣である。本書の內容を紹介するに當り、主として著者のいはゆる全盛期說の論據をさぐることをも併せ許されたい。

本書は全篇を分つこと十九。うち四、五、八、十三、十六、十七の五章は主として范仲淹・歐陽脩・王安石三政治家の時代及び個人叙述のために章をさき、對外關係については二、六、七、十八の四章をこれにあて、その殘りの九章を對內的な諸事項文運の興隆、科擧、兵制、黨爭等に關して概說してゐる。うち財政經濟については獨立せる章を設けること僅かに一、卽ち「仁宗期の財政及び經濟」あるのみである。

全體としてこれと言つて目新しい新說もないが、先きにも一言した樣に全盛時代の政治家の政治思想をなるべく詳しく論じようとされてゐる。なかでも王安石以上によりくはしく、范仲淹をあらゆる角度から觀察して見ようとしてゐる。恐らく著者の范仲淹觀察は過去のいづれの史家よりも詳細・綿密・叮嚀を極めてゐるであらう。そして結論として著者が到達し得た范仲淹觀は彼が絕讚に値する政治家であつたといふ點である。卽ち朱子の「天地間氣第一流の人物」なる語をそのまゝ採用した後、彼こそは「博大高明、天資忠孝の士」であり「六經に博治し……剛大淸純の士」であり、「國事を論議するに至公の心を以つてする一般の風潮は彼によつて開かれた」(六一頁)と言ひ、また彼は「六經の大義を融化體得せる規模濶大の思想」の持主で、(六二頁)同時に「經世的な色彩が强く」(同頁)、「臣道として上は君を誠にし、下は民を誠にするにあつて、彼自らを誠にし更に君民を誠にし、人を以つて天地に參し、大中至誠ならしめんと努めたものであり、彼の信念はこゝにあり、活動

の源泉であつた。彼こそは天地人の理を究むる哲人であり、兼ねて古今治亂の原を明察する經世家であつた」（六三頁）と最上級の形容詞をもつて形容してゐる。要するに范仲淹は個人としても公人としても全く一點の非のうちどころもなきが如き立派な政治家として描寫されてゐる。而して彼の時代の治政は「政府の威令は嚴酷に失する所なく、ゆとりある支配を爲した。慶曆の政治のよさがこゝに在つた」（一二二頁）と慶曆時代を謳歌した後「慶曆に比し、熙寧の地方官が一般に德量がとぼしく士風の劣るところがあつた」（一二七頁）とも述べ、更に進んで「支那の歴史では中央政府が地方政治に甚だ干渉せぬ場合に、地方親民官の善政が現はるゝ場合が多く、地方官も民政に力めし人は可とし、然らずんば民情に從つて治め、靜を守る吏は良治を致したと思はれる。この點に於て慶曆の政治は治道の要諦にふるゝ所あつたと言ひ得む歟」（一二二頁）と慶曆政治をもつて治道の理想型だとしてゐられる。

一方王安石に對しては、その革新政治を評して「之が遂行に當り劃一的條約主義によつた所に觀念論の弊害を看取出來る」（二一二頁）と言ひ、「政策の實施に於て幾多の矛盾、弊害を伴つた」（一八八頁）と言ひ、個人の性格についても「事を急ぐ一徹の性格」（同上頁）の持主であつたとのべてゐる。また「當時一般の國家經濟觀念に比し、餘りに進歩隔絶せるものがあつた」（一九九頁）とも評し、その革新の實施は神宗の信任をもつて「一意孤行し」「電光石火的」で「群論の起る間隙なき有樣であつた」（二一五頁）とも言つてゐる。かくの如く慶曆、熙寧の二大革新家及びその政策に上下優劣の差をおかうとしてゐる事がはつきり認められる。

以上、著者のいはゆる「北宋全盛期の歴史」なるものはまさしく神宗の時代にあらずして仁宗時代、慶曆時代にあつたと見做して差支ないわけであるが、しかし宋の戰時財政や社會一般の狀態等を實際考慮に入れると、著者は北宋時代就中仁宗時代を少し樂觀的に觀てゐられはしないかといふ樣な氣持がする。また范仲淹個人の人格や政治についても宋代否近世の士大夫の內面的觀察を今少し行へば、もう少しちがつた結論が出て來るのではなからうか。また著者も明言されてゐる如く、范仲淹に「實行力がとぼしかつた」のであれば、彼は要するに平和的時代では立派な革新政治家たりえても、宋代の如き、いはゞ戰爭遂行中の日本に於けるが如く（しかも宋は負けいくさばかりしてゐた）より强力的な政治の出現が待望されるのであるから、觀念論的な德化に俟つ爲政者の仁政や道義的な儒者流の德治政策だけでは追ひつかないのではあるまいか。

この頃の士大夫は結局貴族化してしまつて、眞に庶民のために粉骨碎身して政治にはげむだけの氣概のある政治家は少なか

つた。彼等政治家の目標は結局彼等自身の爲めの自己辯護であつた。結局いかに名論卓說をはいても實行力の伴はぬ政治家のみでは宋代の危機は到底切りぬけられなかつたのではあるまいか。

以上で批評紹介を終る。最後に本書は非常な勞作であり好著であることを繰返へし力說して置く。長編、宋會要をはじめ膨大な宋の根本資料に基ける點が特に尊くまた漢文を平易な日本語によみ下し漢文の引用句が一つもない事なぞ、目に見えない苦心がはらはれてゐる。小さいことではあるが敬服すべきである。

〔荒木敏一〕